

カンボジア出張（AWaP 業務）報告

国際戦略室 今島祥治

「マジか?!?!」

成田発、上海で乗り継ぎ、ここは11月3日夜中の0時前のプノンペン国際空港。

空港でアライバル・ビザの申請の後、指示どおりターンテーブルNo.2の前にたどり着いた出張者3名（日本環境整備教育センター白川氏、JS熊越氏・今島）が凍り付く。

ターンテーブルNo.2は、すでに荷物を吐き出し終えて、流れは既に止まっている。残された5, 6個の荷物の中には、自分たちの荷物はない。「ターンテーブルって人間の方がターンするんだっけ?」という冗談が苦し紛れに浮かんだものの、本当にシャレにならない最悪の事態が頭の隅をよぎり、冗談を口にすることもできない。

カウンターパートとの打合せは資料無しで、こちらの服装はTシャツ、チノパンか。いつ自分の荷物が手元に来るのだろうか。あきらめ半分で、何気なく後ろのNo.3のターンテーブルに目をやると、見慣れた荷物が流れていく。No.3のターンテーブルはバンコクからの荷物が流れているレーン。

「あつたあ!!!」。旅の恥はかき捨て。なぜバンコクからのターンテーブルに上海から来た荷物が流れているのかなんて考える余地もなく、思わず大声を上げてしまった。こんな状況から始まった今回の出張。疲れと安堵からため息が漏れる。

気を取り直してタクシーに乗り込みホテルに到着。音が欲しくてテレビのリモコンを操作する。テレビはウンともスンとも言わない。そのまま寝落ち。

翌日4日から仕事。熱めのシャワーを浴び、目覚める。

今回の目的は、国土交通省からJSが受託したAWaP業務^{*1}のうち下水道と浄化槽の一体整備の可能な箇所を探し、プレF/Sの実施に必要な情報を収集し、現地視察をすることだった。この業務ではJSからJICA長期専門家としてプノンペンに派遣されている小松専門家の力を借り、MPWT^{*2}のPhibal局長の意見も踏まえ、カンボジアのスパイリエンという地方都市に焦点を当てることにした。



メコンの恵み

スパイリエン州は、カンボジアとベトナムの国境の州で、スパイリエン市はプノンペンから車で3時間半程度。スパイリエン市には1万人強の住民が住んでいる。ホテルはスパイリエン市に一つだけ。プノンペンからスパイリエンに移動する途中にJICA支援で建設した「つばさ橋」という橋がある。このそばに通訳さんお奨めのメコン川のエビ（といってもロブスターのような大きさ）を食べることができる食堂で食事をする。まさにメコン川の恵みと言って良い。

閑話休題。とにかくスパイリエンで下水道エリアにおける下水道

と浄化槽の一体整備による早期に水質改善を見込めるプロジェクトの箇所を探しの業務が始まった。なぜ、下水道エリアで下水道と浄化槽を一体整備すると早期に水質改善が見込まれるのか。その仕組みはこうだ。

下水道は、下水処理場から管渠を伸ばして徐々に上流の地域を迎えに行く。上流の地域に管渠が到達するには、それなりの長い時間がかかり、上流の地域は管渠を迎えに行くまで汚水を垂れ流すことになる。そこで、上流の



未処理汚水の放流先の川での漁業

地域に下水道の管渠が迎えに行くまで大型の浄化槽を設置し、浄化槽での汚水処理をする。管渠が到達する 10 年後、15 年後に浄化槽の役割を終え、下水道に接続する。そうすることで「2030 年までに未処理汚水を半減する」という国連で採択された SDGs のターゲット 6.3 を達成しようという事である。

スバイリエンでは、3 日間で JICA が支援して建設された病院、スバイリエン市庁舎、小学校 2 校、高校 1 校を調査した。このうち市庁舎や小学校 2 校は、周辺に住宅地もあり、浄化槽設置の条件に当てはまると思われた。

また、スバイリエン州はバベット市という経済特区を抱えている。表通りは中国資本のカジノや豪華なホテルが乱立しているところである。少し表通りから入ると、地元の住民が環境的には恵まれていない状況で生活をしている。住民にも話を聞くことができたが、家の汚水と雑排水は、セプティックタンクのような汚水柵のような物を経て、水路に流しているそうだ。その設備を設置するのに 200 ドルかかったそうだが、家の周囲が汚いのは嫌だという事で、自費で設置したそうだ。管渠が住宅の目の前に迎えに行ったときに自費で接続する可能性を考えると、かすかに淡い期待であるが、若干の光も見えた気がした。(下水道使用料を支払うとなると話は別かもしれないが。)

私たちが訪ねたスバイリエン市の小学校の校長先生からは、「浄化槽設置のために契約電力のアンペアを上げるのは問題ないし、近隣住民の汚水を小学校に設置する浄化槽で処理するのも問題は無い。ただ、誰が維持管理費を支弁するのか。維持管理費を近隣の住民が負担するとなると、反対が起こるのは目に見えている。」とのコメントをいただいた。

住民啓発から始まり、住民への説明、料金の取り方、色々なことを考えなければならぬ。本当に難しい問題だと思う。



食事中に何度も繰り返される乾杯

AWaP の枠組みでのプロジェクト化の道は、初めの一步を踏み出したばかり。今回、カンボジアでの現地打合わせや現地視察で MPWT・スバイリエン州 DPWT の職員の方々、学校の校長先生方、住民の皆様、と幅広い意見をうかがうことができた。AWaP の初めの目的である SDGs ターゲット 6.3 を達成するために今後とも尽力したいと心を新たにした出張だった。

最後に、今回の出張でお力添えをいただいた MPWT の Phibal 局長、ずっと同行いただいた MPWT の Sovanndy さん、様々な調整とご意見をいただいた小松専門家をはじめ、皆様に感謝の意を表したい。

注)

※1 AWaP 業務：AWaP (Asia Wastewater Management Partnership) は2018年7月に、SDGs ターゲット 6.3 を達成するために北九州で発足したパートナーシップ。参加国は日本、カンボジア、インドネシア、ミャンマー、フィリピン、ベトナム。JS は2019年度 AWaP 参加国の汚水管理に関する年次レポートの取りまとめと、下水道と他分野（浄化槽等）のパッケージ整備を2都市でプレF/Sを実施する。

※2 MPWT : Ministry of Public Works and Transport) カンボジア王国公共事業運輸省。
DPWT は各地方の出先機関